HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第31号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2012-08-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73578
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_31.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

月刊 DRF
Digital Repository Federation Monthly

第31号
No. 31
August, 2012

【大特集】OR 2012
・ROAT（DRF評価プロジェクト）
・イベント情報（中堅担当者研修ほか）

大特集

OR 2012

http://or2012.ed.ac.uk/

The 7th International Conference on Open Repositories

ORは、リポジトリやオープンデータをテーマとした国際会議です。7回目を迎える今年は 7/9-7/13に英国エディンバラで開催されました。イベントの熱気を、日本から参加された10名の方からのレポートでお伝えします！

エディンバラ大学 Playfair図書館

会場の様子

ポスター発表の様子

青山 俊弘　鈴鹿工業高等専門学校 電子情報工学科 准教授

今年のOR12で特徴的だったのは、単なる文献の保管を目的としたリポジトリは既に会議の話題の中心でなく、研究データ、教育コンテンツ、マルチメディアなどをどのように集め、メタデータをつけるかということが話題の中心となっていたことです。Katherine Fletcherらによる発表では、再利用しやすい粒度の教育コンテンツを集めるリポジトリであるConnextions(cnx.org)を紹介していました。Connextionsでは、SWORD v2を拡張したOERPubを利用し、MSOffice、OpenOffice、Google Docsなどの文書ファイルやWikipediaやBlogなどのhtmlファイルを独自のメタデータとともにリポジトリに保管する仕組みを提供しています。また、ブラウザ上での編集や履歴管理、PDFやEPub形式への出力などに対応しており、リポジトリを通じた教育コンテンツのハブとなることを目指しているものでした。今後、教育コンテンツの提供だけではなくLearning Management System (LMS)などと連携することで、e-learningのコンテンツ提供の中心的役割をリポジトリが果たすことになるのではないかという予感を感じさせるものでした。

池田 大輔　九州大学大学院 システム情報科学研究院 准教授

以前からORでは、教育用資料や科学データを主な例として、論文以外のコンテンツを対象にしたリポジトリが多く見られましたが、今年のORではこの傾向をより積極的な研究支援の方向に進化させた例が2つ見られました。一つは、ツイート等のデータを収集し、研究用に提供するというものです。例えば、人のつながりなどを社会科学的に研究しようとしても大規模データを自前で収集維持するのは困難で、このような点を支援するのは興味深いと思いました。もう一つは、テキストマイニングのワークショップです。今回の発表ではそこまではありませんでしたが、大量にコンテンツやデータ、ログ等がリポジトリに蓄積されれば当然有望なマイニング対象となるでしょう。

青山先生

池田先生(You Tubeより12分頃＊)

行木先生

蔵川先生

山地先生

行木 孝夫

北海道大学 大学院理学研究院数学部門 准教授

日本では学位論文の登録が進んでいないこと念頭に、私個人としてリポジトリの相互運用に興味を持っていますので、7月10日午前の ETHS: Workshop: EThOS Interoperabilityに参加しました。セントラルな英国の学位論文リポジトリと機関リポジトリの学位論文コレクションとの相互運用に関わる問題解決に関する報告が主な内容でした。特に、セントラルなリポジトリと機関リポジトリのコンテンツを同期する発想と問題意識は広く応用できるはずです。同期の過程で発生する問題点について一つとは限らない解決方法と未解決問題、問題意識を共有するコミュニティが存在しています。本会議ではCornellのSimeon Warnerの講演、ResourceSyncというリポジトリ上のリソース同期に関するプロジェクトが印象的でした。OAI-PMHがメタデータなら次はリソース全体という方向です。

蔵川 圭

国立情報学研究所
学術コンテンツ課コンテンツシステム開発室 特任准教授

何度か続けて同じ会議に出席してみると、変化のあるところと無いところ、会議に集まってくる主要な面々の興味の中心が見えてくる。米国や欧州と開催地によって会議の内容に違いがあることもわかる。オープンリポジトリの世界は、常に次の価値を求めて議論を押し進めようとする勢いがある。ここでの定常的な議論の中心は、一次データの素直なメタデータ表現とメタデータ処理のワークフローである。そのメタデータの主要な対象は、論文から実験データへと完全に移行している感がある。展開の一つに教材も取り上げられている。識別子についても、論文から著者、実験データへと移行している。これらのことを受けて、新しいサービスを想像したテキストマイニング技術の適用も模索されている。一方で、DSpace、EPrints、Fedoraのユーザーミーティングでは開発チームによる堅実な実装と計画、ユーザーから様々な分野への適用事例が報告されている。論文のサイテーションメカニズムを前提とした信頼のあるメタデータ基盤の構築が基礎となっている。我々は、繰り返しの議論と画一的な行動にとどまることを許されていない。

山地 一禎

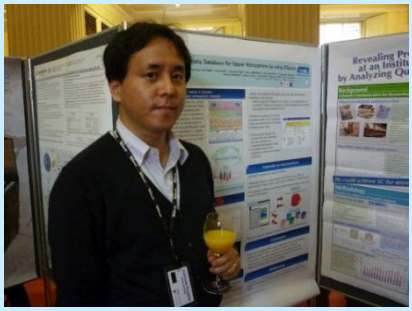
国立情報学研究所
学術ネットワーク研究開発センター 准教授

「IRから研究のデータを公開する？」「実験データに関するメタデータセットを決める？」、日本にいると考えられないような課題に取り組み、試行錯誤ながらも本気でそれを実現させようとしています。いくつかの主要な財団によるデータ公開の指針にともない、eScienceライブラリアンを主体として、こうした議論が活発に交わされていました。先行大学では、研究費獲得から研究中のデータ保全、プロジェクト終了後のデータ公開までを、一連の流れとして捉えてサポートする体制を整えつつあります。オープンアクセスではなくオープンデータを、IRを軸に図書館員が支えようとしている活動に、日本との大きな違いを感じました。

小山 幸伸

京都大学 理学研究科
附属地磁気世界資料解析センター
http://www.iugonet.org/

今回で3回連続参加となった私の発表タイトルは、「DSpaceを用いた超高層大気の為のメタデータ・データベース」（和訳）です。私が初めて参加したOR2010当初と比較して、年々リポジトリ・ソフトウェアを用いた科学データ管理に関する発表件数が多くなっていることを実感しました。この種の取り組みは、科学データと、それを元に生成された科学文献との結び付きに発展する可能性があり、科学文献自体の付加価値の向上ならびに科学文献利用者の利便性向上に寄与すると期待されます。
最後に、本稿執筆の機会という異分野交流のきっかけを得られたことが、OR 2012における最大の収穫でした。

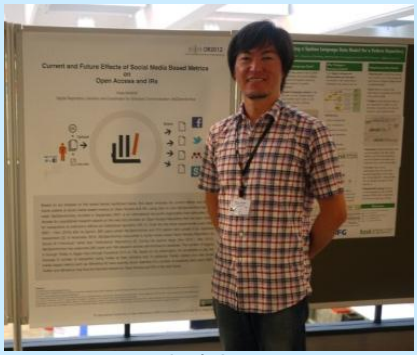


小山先生

坂東 慶太

MyOpenArchive
http://keitabando.org/

昨年初めて参加したOR2011（米、オースティン）に引き続き、2年連続でポスター発表者としてOR2012（英、エディンバラ）に参加してきました（参加したのは2日間（2日目と3日目）のみ）。
今年のポスター発表タイトルは「Current and Future Effects of Social Media-Based Metrics on Open Access and IRs」。OAやIRはソーシャルメディア上の指標からどの様な影響力を受け、またどの様に適応すべきか。この疑問をリポジトリコミュニティに投げかけ、そしてカンファレンス参加者から意見を聞いたり議論することを目的に参加しました。昨年は訳（飛行機乗り継ぎに失敗して遅刻）あって披露出来なかったMinute Madness（ポスター発表者が、1人持ち時間1分で自分のポスターのアピールをする）も無事こなし、私の発表内容に関心を持って下さった方々と、夜のレセプションでポスターを前に交流出来たのは大きな収穫でした。
参加したセッションの中で印象的だったのは、昨年は（恐らく）殆どキーワードとして語られなかったAltmetrics（研究業績を、ソーシャルメディア等を利用してリアルタイムで評価するという概念）が、Pecha Kucha（各プレゼンテーション発表者が、1人持ち時間7分で20枚のスライドを発表する）セッションで幾つか言及されていたこと（Open Access Statistics、Open Metrics for Open Repositories等）。オープンアクセスジャーナル（PLoSやBMC）は既にAltmetrics対応を始めており、近い将来、IRにとってもAltmetrics対応がトレンドのひとつになるのでは、という印象を受けました。
40ヶ国以上から480を超える登録参加者があったOR2012。各セッションやレセプション、ディナーを通じて多くの同志達とコミュニケーションをはかれたことこそが最大の収穫だったのかも知れません。年に一度のリポジトリ担当者の祭典、来年（OR2013）はカナダで、再来年（OR2014）はフィンランドで開催予定とのこと。みなさんと一緒に参加し、世界中の仲間たちと交流出来ることを、今からとても楽しみにしています。



坂東さん

塩﨑さん

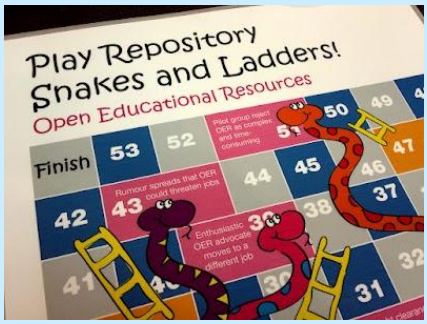
大園さん

西薗さん(You Tubeより9分頃＊)

＊You TubeのURLは4p下方に掲載

全員集合？

バッグ



すごろく？

DRF、RSP合同のポスター
日本とイギリス両国のリポジトリコミュニティが人材育成に関して相互協力していくことを発表
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?Papers%20and%20Talks

塩﨑 亮

国立情報学研究所
学術基盤推進部 機関リポジトリ担当
（JAIRO Cloudをポスター発表）

初参加組の雑駁な感想です。Open Dataなどの対象範囲の拡大、あるいは、Linked Dataなどのデータ利活用の実例などだけでなく、（データを含めた）デジタル情報の管理・保存に関する話題がプログラム内にしっかり組み込まれていることが印象深かったです。日本国内での取組みは極めて限られており、この違いを生むものは何なのでしょうか。研究者／技術者にとって魅力的な領域ではないのかもしれないですが、チャレンジングなテーマですし、何かやりたいところです。また、NIIの共用リポジトリに類似したホスティング型のリポジトリサービス例もいくつか確認でき、あるいは、イベント運営においても、講演内容がすぐさまブログ形式で掲載されることに驚かされ、インフォーマルな空間を自然に演出するウマさ（西薗さんもダンス！）も体感でき、参考となることはじわじわとでも取り込んでいければと思います。

大園 隼彦

岡山大学 附属図書館（DRF特派員）

「Developer's Challenge」熱かったです。参加者は、3分の持ち時間で28のアイデアをプレゼンしました。一番感心したのは、そのアイデアもさることながら、developerコミュニティの層が厚いということです。その一方ではRSP (Repositories Support Project)に代表されるような（developerではない）人材育成の仕組みもしっかり作られている。後者の仕組みは日本でも整いつつありますが、前者はこれから活発にしていく必要があるように感じました。
DRF関連の研修を修了した（する）みなさん、ぜひDRFのワーキンググループに参加してください。研修を修了した人が次代の担当者の育成に関わり、中堅の人は世界を意識して活動をする必要があると感じました。DRFを日本の機関リポジトリの成長を担う持続可能な組織にしましょう！！

西薗 由依

鹿児島大学 学術情報部（DRF特派員）

OR2012のWordle（http://adamfield.net/or2012/wordle.png）のメインストリームは"data"でした。リポジトリは文献だけでなく、データをはじめとして扱うコンテンツを拡大し、それらの確実な捕捉、管理、保存、リユースのための仕組みを構築することで、研究教育活動の隅々と結びつきを深めようとしています。会議の性格や政策的背景もあるかと思いますが「オープンアクセス」は既に当然のこととして、その先の研究基盤の発展のために、システムの相互運用性や信頼性、機能向上などについて図書館関係者・研究者・ディベロッパーらが一緒になって活発な議論を行っていたことが印象的でした。国内のリポジトリコミュニティが今後取り組むことはたくさんあると感じました。

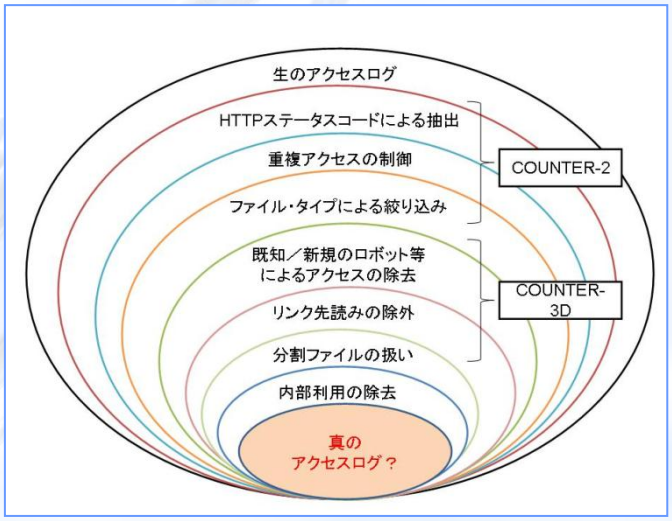
- OR2012 発表資料
  https://www.conftool.net/or2012/sessions.php
- Poster Minute Madness at OR2012(You Tube動画)
  http://youtu.be/8C53TmwK8UM
- OR2012 Webアルバム
  http://www.flickr.com/groups/or2012/pool/
- 坂東さんのWebアルバム
  http://www.flickr.com/photos/keitabando/sets/72157630582030562/

統一基準での機関リポジトリ評価を目指して

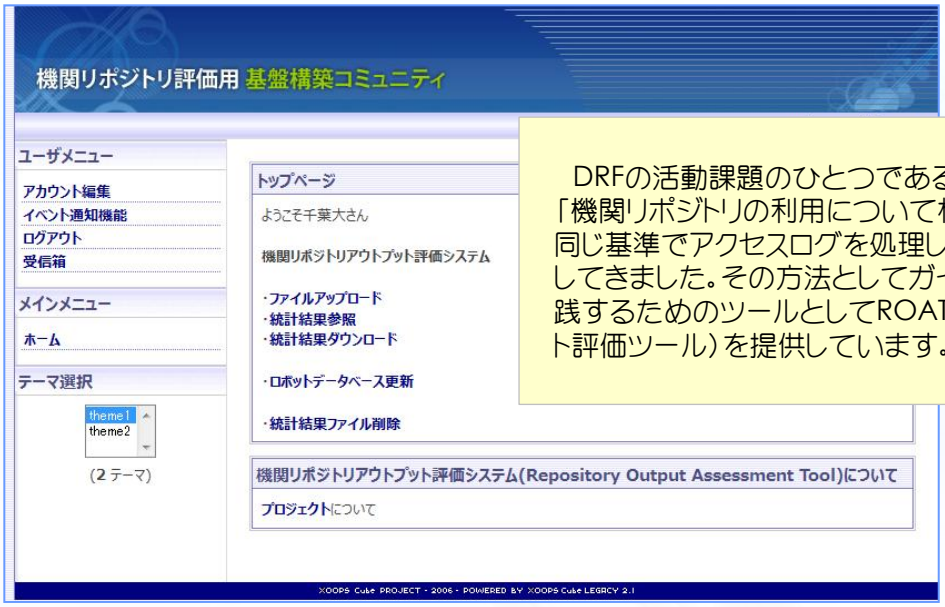
DRFでは効果的なリポジトリ運用のために様々な課題に取り組んでいます。
今回はそのうちのひとつ「評価プロジェクト」をご紹介します。

「登録コンテンツは何件くらい？」「どれくらい利用されているの？ それは多いの少ないの？」機関リポジトリの運用を開始すると、聞かれるのではないでしょうか。最近ではさまざまな統計でも機関リポジトリに関する項目が置かれるようになりました。登録コンテンツ数とアクセス件数は、ランキングに利用されることもあります。

ところで、機関リポジトリのアクセスログを眺めたことがあるでしょうか？
生のアクセスログには、コンテンツ以外のファイルへのアクセス（ロゴ画像の表示など）やブラウザのリンク先読み機能などによるログも含まれます。特に多いのは、Googlebot、Yahoo Slurpなど検索エンジンのロボット等によるアクセスで、その種類は常に増えています。



CA1666 - 動向レビュー：機関リポジトリの利用統計のゆくえ / 佐藤義則
http://current.ndl.go.jp/ca1666



DRFの活動課題のひとつである「評価プロジェクト」では、「機関リポジトリの利用について相対評価をするためには、同じ基準でアクセスログを処理して比較すること」を提唱してきました。その方法としてガイドラインをまとめたり、実践するためのツールとしてROAT（機関リポジトリアウトプット評価ツール）を提供しています。

ROATの便利なポイント

- 指定形式のアクセスログをアップロードして一晩待つだけで、不要なログを除去した統計結果が出力できる
- コンテンツ毎のアクセス件数は、JAIROにハーベストされたメタデータ情報を付与していてわかりやすい
- 電子ジャーナルで同じ論文が公開されていれば、そのアクセスログと合算して論文の利用件数をカウントできる（電子ジャーナルと同じ基準で処理しています）

ROATは2012年度中に NIIのクラウド・サーバーに移行します。
ワークショップも予定しています。
これからの機関リポジトリ評価について一緒に考えてみませんか？

ROATサイト：
http://roat.ll.chiba-u.jp/

ROATプロジェクト担当：武内 八重子（千葉大学）

間もなく受付開始!

平成24年度 機関リポジトリ中堅担当者研修

日時: 平成24年9月26日(水)～28日(金)
※2泊3日の合宿形式です。

会場: 国立女性教育会館

定員: 24名

受講対象者: 所属機関で機関リポジトリ構築を担当している方で、国立情報学研究所学術ポータル担当研修(平成18～22年度)またはDRF機関リポジトリ新任担当者研修を受講済み、ないし、相当以上の知識を有する方

申込および詳細:
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?senior_2012

申込期間: 8月2日(木)～8月31日(金)
※申込者には、受講者選考後、DRFから受講可否の通知を行います。
※受講者には研修の約2週間前に事前課題をお送りします。

プログラム(抜粋)

9月26日(水)15時開始
「国内機関リポジトリの現況と今後の展望」
山本和雄(北海道大学)
「機関リポジトリの管理」鈴木雅子(旭川医科大学)
「オープンアクセス出版の動向」杉田茂樹(小樽商科大学)
ほか、会場館見学など

9月27日(木)
「海外メーリングリストの議論を追う」栗山正光(常磐大学)
「海外から見た日本の機関リポジトリと図書館専門職」
内島秀樹(筑波大学)
「機関リポジトリ業務運営上の課題」尾崎文代(広島大学)
「前年度受講者事例報告1」南絵里子(小樽商科大学)
「前年度受講者事例報告2」寺島陽子(奈良女子大学)
ほか、班討議(2回)など

9月28日(金)16時終了
「コミュニケーションスキル」外部講師
「雑誌価格問題への抵抗史」尾城孝一(国立情報学研究所)
「大学なき時代の大学図書館のあり方」
土屋俊(大学評価・学位授与機構)
ほか、全体質疑など

昨年度受講者からメッセージ!

- 日常業務が世界の学術情報流通とつながっていることを実感でき、モチベーションが高まること請け合いです！
- 課題は難しいけれども、みんなで話し合えば乗り越えられました。この経験は必ず役に立ちます。
- 充実した3日間をお過ごし下さい。問題は研修の、その後です。一人でも多くの人に内容を伝えること、それを核に何かを行うことです。実際の業務と関係なくても構いません。知識だけを得るのではなく、やりたいことをやるための支えが、この研修で見つかりますように。
- 研修で身に付けた知識、人との交流は決して無駄にはなりません！皆、頑張っていきましょう！
- 豪華な講師陣の講義を一度に聴くことができ、贅沢でした。今年は更にパワーアップするという噂。みなさんの結束力と若さで乗り切って下さい！楽しむことを忘れずに！！

イベント etc. DRF Wikiから目が離せない!

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/

これからのイベント

- 機関リポジトリ新任担当者研修
  筑波会場 8/23-24　岡山会場 9/6-7
  NII会場 10/18-19
- 第4回 SPARC Japan セミナー2012
  「研究助成機関が刊行するオープンアクセス誌」8/23
- DRFmed-MIS29 8/26
  DRF主題ワークショップ(医学・看護学)
  「リポジトリで発信する医療情報・病院図書館との連携」
- rliaison ワークショップ 9/11
  「Do aim too much！(欲張って行こう！)」

次号予告

【特集】平成24年度 第1回 機関リポジトリ新任担当者研修(筑波会場)レポート ほか

編集後記：OR2012に参加された皆様から、文章をはじめ画像も提供していただき、充実した誌面になりました。お忙しい中ご協力下さいました皆様に御礼申し上げます。(AbMon)

月刊DRF 読者アンケート回答受付中!
ご意見・ご要望をお待ちしております。
http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html